博士論文要旨

青少年の攻撃性に関する心理学的研究　－ 包括モデルの構築 －

東北大学大学院文学研究科人間科学専攻
川端　壮康

本研究では，概ね 30 歳未満の若者を青少年と定義し，青少年の適応上の問題について，暴力犯罪や暴力非行のみならず，自殺，引きこもり，うつなどのメンタルヘルス上の問題の背後にも攻撃性が関係しているとの知見を踏まえて，これらの問題について，問題の根治を目指した介入のための土台となる包括的な攻撃性のモデルを理論的に構築し，実証化を試みることを目的とした。

攻撃性の分類の多くは，それはおおよそ，怒りや恐れなどの感情に多く影響され，あまり組織化されていないタイプの攻撃性と，感情や生理的喚起をあまり伴わない目的指向的なタイプの２つの典型的類型を対比させており，本論文でもこれら典型的な２タイプの攻撃性である，反応的攻撃性 vs.能動的攻撃性という対比を採用し，あらためて機能の違いを確認した。そして，攻撃性のモデルについての先行研究の検討から，具体的な予測力の面で有望なものとして社会的情報処理（Social Information Processing: SIP）モデルを採用し，元々は認知的変数から構成されていた SIP モデルに，感情過程を組み込んだ最新のモデルである Lemerise & Arsenio(2000)の SIP モデルに，さらに動機付け変数を組み込むことで，知・情・意という人間の精神の 3 つの機能を包括した包括的なモデルを構築できるとして，統合 SIP モデルを新たに提唱した。

この統合 SIP モデルの予測力を検討するため，反応的攻撃性と能動的攻撃性のそれぞれについて，統合 SIP から抽出した仮設モデルについて一般の大学生・専門学校生及び少年鑑別所入所少年を対象に，場面想定法による実験を行なった。研究１では，反応的攻撃性について，一般の大学生及び専門学校生 130 名を対象に，社会的葛藤場面を提示し，状況の解釈，攻撃行動の評価といった社会的情報処理変数と，怒り，感情調節といった感情変数が反応的攻撃性からなる仮説モデルの予測力を検討した。その結果，感情変数を組み込んだ仮説モデルは，従来の認知変数のみからなる SIP モデルよりも予測力が高いことが示された。共分散構造分析によって得られたモデルからは，怒りは反応評定を介して間接的に攻撃行動に影響を与えるとともに，直接に攻撃行動を促進もするが，相手の敵意意図の帰属や感情調節は，相手に対する攻撃的行動を肯定的に評価することに影響を与え，攻撃行動へは，その反応評定を経て間接的にのみ影響を与えることが示された。

研究２では，反応的攻撃性について研究１と同様の実験を，少年鑑別入所少年 82 名を対象に実施した。その結果，研究１と同様に，感情変数を組み込んだ仮説モデルは，従来の SIP モデルよりも攻撃性の予測力が高いことが示された。ただし，少年鑑別入所中の非行少年においては，一般の大学生・専門学校生においては有効であった，感情調節が効果を持たないことが明らかとなった。モデル検討においては，大学生等と異なり，感情調節の効果が見られなかったが，これは反社会的行動問題を抱える非行少年において，怒りを適応的に処理するような感情調節が攻撃行動の抑制のために有効に機能していないことを示唆するものと考えられた。

研究３においては，能動的攻撃性について，大学生 91 名を対象に，何らかの願望を高めるような場面において，研究協力者の，攻撃行動を取った場合も結果の予想，攻撃行動を取ることについての評価，攻撃行動を実行することへの自己効力のそれぞれを実験的に操作し，これが能動的攻撃性に及ぼす影響を検討した。その結果，その結果，願望が高まるような状況下で，能動的攻撃行動が願望充足に肯定的な結果を生じさせると予想すること，そのような場面での能動的攻撃行動を肯定的に評価すること，能動的攻撃行動を実行する自己効力を高く評価することは，それぞれ能動的攻撃性を高めることが示された。また，願望変数は能動的攻撃性を有意に促進せず，願望変数と他の変数との交互作用も有意ではなかった。結果の予想，反応評価，自己効力の評価の３変数の中では，結果の予想が，自己効力の評価の能動的攻撃性への影響の調整変数として機能していた。これによって，能動的攻撃性の決定過程においては，その攻撃行動が自己の願望の充足に有効であるという評価が大きな影響を持ち，これが有効であって初めて他変数の効果も効果を持つことが示された。

本研究によって，いわゆる知・情・意という人間の心の機能を三つに分けたその全てを包括した攻撃性のモデルを提示した。このモデルは，現在，我が国を含む多くの先進国に見られる，青少年の犯罪や非行の減少と，ネットいじめや抑うつや自殺といった異なる形で現れる不適応を，一貫して攻撃性が関わる問題として捉え，対症療法的でない，根治的な介入策を考案するための基盤を提供するものとして重要な意味を持つと考えられる。

論文審査結果の要旨および担当者

提　　出　　者	川端　壮康
論文審査担当者	（主査）教授 阿部恒之，教授 坂井信之，教授 小泉政利， 准教授 辻本昌弘，准教授 荒井崇史，准教授 河地庸介
論　　文　　名	青少年の攻撃性に関する心理学的研究――包括モデルの構築――

本研究は，概ね30歳未満の若者を青少年と定義し，暴力犯罪・暴力非行，さらには自殺・引きこもり・鬱などのメンタルヘルスに関する青少年の適応上の問題の背後にある攻撃性に介入し，これらの問題を解決するための，攻撃性の包括的なモデル「統合 SIP モデル」構築を目的として行われた実証研究である。

Lemerise & Arsenio (2000)は，認知的側面に着目した攻撃性のモデル，社会的情報処理（Social Information Processing: SIP）モデルに，感情的側面を加味した新たなSIPモデルを提唱している。**研究 1** では，感情の寄与を確認するために，反応的攻撃性について，一般の大学生及び専門学校生 130 名を対象に，社会的葛藤場面を提示し，状況の解釈，攻撃行動の評価といった認知（社会的情報処理）変数と，怒り，感情調節といった感情変数からなる仮説モデルの予測力を検討した。その結果，感情変数を組み込んだ仮説モデルは，従来の認知変数のみからなる SIP モデルよりも攻撃行動の予測において優れていることが示された。共分散構造分析によって得られたモデルからは，怒りは反応評定を介して間接的に攻撃行動に影響を与えるとともに，直接に攻撃行動を促進することが明らかになった。また，相手の敵意意図の帰属や感情調整の低さは，相手に対する攻撃行動を肯定的に評価することにつながり，その反応評定を経て間接的に攻撃行動に影響することが示された。

研究 2 では，反応的攻撃性について研究 1 と同様の実験を，少年鑑別所入所少年 82 名を対象に実施した。その結果，感情変数を組み込んだ仮説モデルは，従来の SIP モデルよりも攻撃行動の予測力が高いことが確認された。但し，少年鑑別所入所中の非行少年においては，一般の大学生・専門学校生においては有効であった，感情調節が効果を持たないことが明らかとなった。これは反社会的行動問題を抱える非行少年において，怒りを適応的に処理するような感情調節が攻撃行動の抑制のために有効に機能していないことを示唆するものと考えられた。

研究 3 では，さらに能動性・動機づけの側面を加味して，大学生 91 名を対象に，何らかの願望を高めるような場面において，攻撃行動による結果の予想，攻撃行動についての評価，攻撃行動に関する自己効力感を操作し，能動的攻撃性に及ぼす影響を検討した。その結果，能動的攻撃性の決定過程においては，その攻撃行動が自己の願望の充足に有効であるという評価が大きな影響を持ち，これが有効な場合にのみ他変数も効果を持つことが示され，能動性・動機づけをモデルに入れることの妥当性が確認された。

以上の研究は，青少年の問題行動に介入する際には，これまで検討されてきた認知（cognition）的側面のみならず，感情（affect），能動性（conation）の総合的観点を加えるべきであるという，有益な新知見をもたらすものである。よって、本論文の提出者は，博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。